様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６４８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ００７７１

研究課題名（和文）現代生活学研究　～生活者がつなぐ食（消費）と農（生産）～

研究課題名（英文）Contemporary Livelihood Studies-Focus on the role of Seikatsusha who Connects Food (Consumption) and Agriculture (Production)

研究代表者
上村　協子（UEMURA, Kyoko）

東京家政学院大学・現代生活学部・教授

研究者番号：００３４３５２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　現代生活学とは、生命の維持、生活の質を重視する生活者の視点から、人間生活における個々人の日常的行為と生活の諸条件の相互作用について、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、持続可能な社会の創造に貢献する実践的総合科学である。
　本研究では、生産と消費をつなぐ現代生活学研究の意義を、日本の食生活改善運動と学校・家庭の食教育、20世紀後半韓国の栄養改善事業と栄養士教育の関わりを軸に提示した。また「生活者とは誰か」の著者、天野正子が描いた５つのリカレント社会①食が結ぶ都市と農業との共生型②男女共同参画型③環境循環型④福祉循環型⑤ライフサイクルリカレント型をもとに考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　生活者とは、生活が危機に直面した時代の転換点で、それぞれの時代の支配的な価値から自律的な、言い換えれば「対抗的」（オルターナティブ）な生活を試行錯誤し、迂回路をとりながらも、隣り合って生きる他者との協同行為によって共に作ろうとする個人である。
「生活」という概念は、未分化で学門的ではないとされてきたが、生活経験を振り返るには何らかの自省を伴う「倫理性のもつ強み」をもつ。
　生活改善運動など近代化の歴史を振り返り、消費（食）と生産（農業）が分断されてきた流れを変えるために、自らがつながりをつくりかえる現代生活学研究と持続可能な社会につながる５つのリカレント社会構想を提

研究成果の概要（英文）：　Contemporary Livelihood Studies is a practical comprehensive science that contributes to the creation of a sustainable society.Using various scientific methods, it looks at the interaction between everyday-life activities of each individual and various living conditions from the viewpoint of Seikatsusha, the type of people who value maintaining their lives and the quality of lives.
　This project includes the issue of movements of living conditions implemented in Japan and South Korea. The relationship of daily-life improvement campaigns and food education (shokuiku) conducted at Japanese schools and homes and of the government’s nutrition improvement projects and nutritionist education program implemented in the latter half of the 20th century Korea are examined as the core research.
　The significance of Contemporary Livelihood Studies which link consumption and production is represented within the framework of 5-types of recurrent societies;　by Masako Amano.

研究分野：現代生活学　家政学　生活経済学

キーワード：生活者　現代生活学　生活改善運動　持続可能　食と農　リカレント社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

現代生活学研究

１．研究開始当初の背景

「生活」という概念はとりとめがなくあいまいで、未分化であるという理由から、しばしば「学問的ではない」「科学から遠い」などといわれてきた。

天野正子（1938-2015）は、試論：「家政学」から「生活科学」へ、そして「現代生活学」へ（2013 年 9 月）において、現代生活学を次のように定義した。

「現代生活学とは　生命の維持、生活の質を重視する生活者の視点から、人間生活における個々人の日常的行為と（それを成り立たせる）生活の諸条件（社会・環境・歴史的条件）の相互作用について、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、持続可能な生活の創造に貢献する実践的総合科学である。」

日本の家政学を再生した現代生活学を、「生活者」視点の学として捉える天野は、現代生活学の未分化で包括性のある生活概念には、生活経験を振り返るには何らかの自省を伴う「倫理性のもつ強み」があるとした。

２．研究の目的

持続可能な社会を実現には、行き詰った循環関係にある既存の構造に対して、生活者視点の新たな循環を構想することが求められる。

生活主体とは「生活を科学的に認識し、生活の目標・課題・問題を設定・発見・解決する意識的積極的な取り組みを実践する個人」であり、また、「生活者」とは、自分でできることは自分で、できないことは隣り合って生きる他者との協同行為によって、それぞれの時代の支配的な価値から自律的な、いいかえれば「対抗的」（オルターナティブ）な「生活」を共に創ろうとする個人）とされる。

現代生活学研究では、生活者がつなぐ食（消費）と農（生産）に中心に、SDGｓ17 の目標も視野にいれ、天野正子の生活概念の強みを整理し、生活者の学「現代生活学」の特質と可能性を新たな５つの循環型（リカレント）社会を構想しながら、検討することを研究の目的とした。

３．研究の方法

その１　生活概念のもつ強みを整理し、現代生活学研究の特徴を明らかにする。

その２　５つのリカレント（循環型）社会、それぞれの背景、循環性のコンセプト、規範もしくは倫理をもとに、生活者視点の循環型社会・リカレント社会を構想する。

図　生活者が描く５つのリカレント（循環）型社会（作成天野正子　）

	ライフサイクルリカレント型	食が結ぶ都市と農業との共生型	環境循環型	福祉循環型	男女共同参画型
背景	生涯時間の延長	地域性(ローカル性)の破壊	資源の有限性	低出生率	女性の権利と参画
循環性のコンセプト	「労働－教育－家庭－社会活動」	「台所－土壌－安全な食－台所」	「自然－人間」	世代間	「ペイドーアンペイドワーク」間
規範 or 倫理	選択の自己決定	連携、安全性	環境倫理	世代間公正	パートナーシップ
価値： 方向性：	経済の量的拡大を基本的価値ないし目標としない社会 経済の「成長」から「サブシステンス」を基軸とする社会へ				

科学研究費　生活文化 ESC（生活文化の世代間伝承による持続可能な消費）研究

代表上村協子　平成 24 年度報告書　89 頁　特別公開研究会 2012 年 11 月 7 日

天野正子「生活者」概念の系譜　～戦時体制期から 21 世紀～

４．研究成果

《はじめに》
　現代生活学を生活者視点の学とした意義について「包括的」「内在的」「当事者性」「相互関係性」の４点から「生活」概念のもつ強みを整理した。

　①《包括的》 さまざまな生活現象の包括的な把握が、「既成の学」にとらわれない自由な研究姿勢を生む。実際に生活学は、家政学、生活科学、民俗学、文化人類学、建築学、生活構造論、社会福祉学、社会学、人口学など学際的メンバーによって構成され、ミクロからマクロに至る多様な生活現象が探求される。
　②《内在的》生活学は法や経済の下位体系としてみなされてきた多様で包括的な日常生活を、あえて正面きって研究の対象とする。科学の論理によって生活に外側から接近し解釈するのではなく、人びとの日常生活の営みを内在的に理解しようとする。
　③《当事者性》 生活を理解し分析しようとするものが、同時に生活を営んでいる当事者でもある。生活学においては、認識主体が同時に認識対象であり、自らが生活を営むことによって、主体の位置や認識内容が異なってくる。
　④《相互関係性》 生活学は生活と社会環境・文化状況との相互関係を、生活の営みに即して探求する概念である。生活の営みの側から社会の状況を展望する試みである。それまで人間の行為や集団、文化などの明示的な分析によって生活への接近を図ってきた方法とは違う。
　重要なのは、生活認識が単なる生活状況の把握にとどまらず、生活問題の把握としての性格を帯びていることである。

　第１章から第５章の内容の詳細は、ホームページ
　　http://uemuralabo.webcrow.jp/kaken3/index.html
　　を参照されたい。以下各章の概要を示す。

　第１章「食が結ぶ都市と農業との共生型」http://uemuralabo.webcrow.jp/pdf/r1/01.pdf
　　１章１節、江原絢子「日本の食生活改善運動と学校・家庭の食教育」
　　１章２節、朴卿希　「20 世紀後半韓国の栄養改善事業と栄養士教育の関わり」

　1920 年以降の生活改善運動のなかで食生活改善運動に関して、学校教育の食教育および料理書や雑誌など家庭を対象にした食記事などにどの様な関連性が見られたのか、その経緯を追いながら概観する。頭で考えて理論を構築する方が高度であるとし、日々の生活のなかで経験をして、知識を知恵にするプロセスが排除されてきた。
　地域や家庭の「機能」に学校教育・近代教育での①合理的②論理的③目に見える形で説明できる上から指標は、どのような影響を与えたのか。日本の食生活改善運動と学校・家庭の食教育をテーマに江原絢子が執筆した。また、日本の生活改善運動と同様な動きが韓国であったのか。朴卿希が韓国政府による農村部の食生活改善事業と栄養士教育の関わりの調査研究を推進した。

　第２章「男女共同参画型」http://uemuralabo.webcrow.jp/pdf/r1/02.pdf
　　２章１節、上村協子「生活パラダイムとジェンダーパラダイム」
　　２章２節、王 雪瑩「国際結婚した中国人女性農業者のエンパワメントプロセス」

　農と食とジェンダー」を軸に女性農業者や生活協同団体を研究課題として重視する点がある。女性農業者に注目して「生活パラダイムとジェンダーパラダイムの融合」の方向を探った。
　『フェミニズムのイズムを超えて―女たちの時代経験』岩波書店 1997 年で天野正子が提示されたロウ・アングルの視点設定や思い込みを捨てた現場発想のエンパワメントが、男女共同参画の核となることが確認できた。

　第３章「環境循環型」http://uemuralabo.webcrow.jp/pdf/r1/03.pdf
　　３章１節、上村協子「食品ロス削減にみるエシカルなコミュニケーション」
　　３章２節、宮川有希「女子大学生の食品ロスへの意識変化 2016～2019」

　食品ロス削減にみるエシカルなコミュニケーション
　食品ロス削減をテーマとして、エシカルな消費に向けた消費者・事業者・行政の連携・協働や個人のコミュニケーションに注目した。消費者庁において行われた「食品ロス削減に関する意見交換会」を契機に、2019 年４月 19 日「もったいないを行動に！食品ロス削減のための戦略企画会議（外食分野）」を経て、『食品ロスの削減の推進に関する法律』が成立・交付され、2019 年から 2020 年にかけて食品ロス削減推進会議により「食品ロスの削減の推進に関する基本的な方針」が検討されるに至った経緯を追った。

第４章「福祉循環型」http://uemuralabo.webcrow.jp/pdf/r1/04.pdf
４章１節、上村協子「先祖になる：老いと死と生の循環がつくる福祉社会」
４章２節、片平理子「ローカルなサブシステンスとしての子ども食堂の可能性
―神戸市の２つの子ども食堂を事例に―」

生活文化の世代間伝承の要素が加わった福祉循環型リカレント社会を取り上げる。１節では2008年９月から2015年までに実施された５回の現代生活学セミナーなど、東日本大震災３・11を境に、郷土料理や食品ロスなど食を切り口にした多様な活動が、公正で持続可能な（Sustainable）な消費者市民社会の取組として認識・展開されていく流れを確認する。４章２節では、神戸子ども食堂の事例をとりあげた。

第５章「ライフサイクルリカレント型」http://uemuralabo.webcrow.jp/pdf/r1/05.pdf
第５章１節、上村協子「継続可能な社会をつくる現代生活学」
第５章２節、高橋淑子「ライフサイクルリカレント　　-人生100年時代の自己選択-」

『ライフサイクルリカレント』循環性のコンセプト「労働―教育―家庭―社会活動」には、持続可能な社会の根幹が集約されている。普通の人、弱い個人が生活していくには、誰しも支えが必要である。

Sustainという用語には「維持・持続」の他、「支援する」という意味がある。生活のあり方やそれを取り巻く社会、経済、自然を含めた環境のあり方について、当事者主体が議論し、利害を調整し、交渉し、生活環境を変えていく生活者の営みが、「生活ガバナンス」である。

生活者のための対抗的（オルターナティブ）な学、現代生活学をいかに進めていくのか、第５章では、家族と国家の関係に注目して社会学と法学の融合を試みた利谷信義に注目した。生活文化ESCの取組と、また、「支え合うコミュニティ（co-supporting　community）の共創」にむけた生活経営学の取組を取り上げた。

《今後の課題》

1920年（大正９年）、生活改善運動が始動した。その後100年間の、食（消費）と農業（生産）をつなぐ日常性に根ざした一人ひとりの生活の論理や思想を発掘する方法論を探ることが本研究の目的であった。

コロナウィルスによって発生したパンデミックは、世界規模での生活の危機と認識できる。生活の危機には、多様なものがある。複合的に発生する生活の危機に翻弄されず、生活者の視点から、持続可能な生活を創造する学が、現代生活学である。

家政学から生活科学そして現代生活学という流れは、生活の危機に直面した時、ものごとを一面的に観ないで考え方を変えて行動し、多面的・長期的にリカレントにとらえる経験によりつながる力をつけ、行き詰った循環関係にある既存の構造に対して新たな循環をつくる生活者のための学びの流れの必要性を見出すことができた。

５つのリカレント社会構想から、「科学」の用語に含まれる「知の多元化」（専門分化）への傾向性に対し、倫理性をもつ現代生活学においては、生活者の人間の知的、創造的営みを大きく一つのものとして包括的に捉える研究方法を拓くことが、持続可能な社会につながることを確認できた。

報告書に掲載した上村の文章は
① 上村協子　女性と持続可能な農山村地域社会―日本女性農業者のエンパワーメント（農村計画学会誌37巻１号、ページ：11-14)、
② 上村協子　天野正子「生活者論」と家政学―家政学のエンパワーメント・アプローチ（家政学原論研究、52巻、ページ：85-89)、
③ 上村協子　食と農をつなぐ女性農業者『地域社会の創生と生活経済 これからのひと・まち・しごと』生活経済学会編、ミネルヴァ書房2017年、ページ：181-186、
④ 上村協子　国際女性学会・国際ジェンダー学会40周年記念誌、2017年―2018年、
⑤ 上村協子　『生活者の金融リテラシー』上村他編 朝倉書店 2019年 などに寄稿した文章を５つのリカレント社会にあわせ、大幅に加筆修正したものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 上村協子	４．巻 37巻1号
２．論文標題 女性と持続可能な農山村地域社会‐日本女性農業者のエンパワーメント	５．発行年 2018年
３．雑誌名 農村計画学会誌	６．最初と最後の頁 11～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上村協子	４．巻 52
２．論文標題 天野正子「生活者論」と家政学－家政学のエンパワーメント・アプローチ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 家政学原論研究	６．最初と最後の頁 85～89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 朴 卿希，上村 協子，片平 理子，江原 絢子
２．発表標題 応用栄養事業(1968-1986)を通してみた韓国の農村における食生活改善事業の実態
３．学会等名 日本家政学会第70回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮川有希,上村協子
２．発表標題 高校家庭科における「家計管理と生活設計」によるセルフエンパワメント
３．学会等名 日本家庭科教育学会　第61回大会/2018年例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮川有希,上村協子,山岡義卓,松葉口玲子
２．発表標題 食を学ぶ女子大生の食品ロス削減意識と行動-SDGｓとプロシューマー教育
３．学会等名 日本消費者教育学会第38回全国大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

《報告書》現代生活学研究会　研究代表者　上村協子　報告書『現代生活学研究～生活者がつなぐ食（消費）と農（生産）～』78ページを作成した。報告書の扉に「現代生活学」研究ことはじめ、自然、人間および社会の位相を全体として把握し、これまでの科学とはことなる５つのリカレント社会構想を5章だてで提示した。 《ホームページで公開》　http://uemuralabo.webcrow.jp/kaken3/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	朴　卿希 (Park Kyounghee)		韓国　仁荷大学
研究協力者	宮川　有希 (Miyagawa Yuki)		東京家政学院大学非常勤講師
研究協力者	小山田　由実子 (OYAMADA Yumiko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	高橋　淑子 (TAKAHASHI Yoshiko)		
連携研究者	江原　絢子 (Ehara Ayako) (40256285)	東京家政学院大学・現代生活学部・名誉教授 (32648)	
連携研究者	清水　理子 (Shimizu Riko) (70204427)	神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授 (34513)	
連携研究者	萩原　なつ子 (Hagiwara Natsuko) (50279717)	立教大学・接合科学研究所・教授 (32686)	